

探偵ウォーカーとエミリー助手の日常

沖縄の苦い野菜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドラマ『屋根裏の道化師』（ラスト・アクトレスのCD）をもとにした二次創作になっております。

探偵ウオーカー Ⅱ 白石紬の演じる探偵役

エミリー助手 Ⅱ エミリーがモデルのオリジナルキャラ

つまりウオーカー×エミリー系の二次創作になっております。

更新は月一回、26日のつむぎの日に行います

目次

暖炉の前でぬくもりを	1
日常の音	8

暖炉の前でぬくもりを

白い石畳とレンガ造りのレトロな街並み。橙色の街灯が頼りなく道標となる夜の景色。昼には奥様方の憩いの道も、夜には人通りのないゴーストタウンに早変わり。

冬の夜。この街は何よりも冷たい場所になる。身を貫く寒風に震えながら、白い息がひとつ吐き出された。ベージュのコートに、同じ色のチェック柄の探偵帽。白縹の艶やかな長髪に、中性的で垢抜けずとも端正な顔立ち。女性に見えるが、その実は男性の彼は、鼻と頬を寒さに染めながら帰路についていた。

「何て寒さだ……雪でも降るんじゃないか？」

少し恨みを込めて厚い灰色の雲に覆われた夜空を見上げる。

「薪はまだあったかな？ あとで確認しないと……」

この寒さの中、暖炉の薪の貯蓄は文字通り死活問題だ。切れれば最後、その夜は寒さに震えながら、ひとり寂しく毛布にくるまる他にない。

彼、ウォーカーの記憶が正しければ、薪はまだ三日分はあったはずである。薪強盗などと奇特な人間でも居ない限り、帰宅すれば暖炉のぬくもりが待っている。

「おや？」

いよいよ自宅前。何となしに自室を見てみれば、カーテンの隙間から灯りが漏れていた。しかし、彼に同居人はいない。家を空けたのは三日前。鍵を掛けた記憶は確かにある。窓ガラスが無事な様子から、そこが侵入経路でないことはわかる。

「また彼女かな？」

しかし、彼がもっている鍵の他にもうひとつ。合鍵を持っている人物がいた。

自称・助手。主に、彼の身の回りの世話や、留守の間の部屋の掃除など。事件に同行してくることもしばしば。医学に明るく、その知識に救われたこともあった。加えて、押しかけて来た時に部屋に入れな

ければ雪に染まる状況などなんのその。家の前に正座をし続けて、風邪を引いてしまう頑固者。

彼は苦笑を漏らして、さっさと入り口に向かった。鍵を使って扉を開けると、彼の予想通り。靴を脱ぐスペース、マットの上に女性もの高そうなロングブーツが置いてあった。家の中に入れば、彼も同じようにマットの上に靴を置き、すぐ横の棚に入れてあったスリッパに履き直した。

「スチュアートくん？ 居るのかい？」

声を掛けながら、コートを脱ぎようとボタンを外したところで、強烈な寒気が服の上から差し込んできた。思わず体をぶるりと震わせた。「な、なんて寒さだ……。もしかして、もう寝ているのか？」

だとしても、冷え込むのが早すぎる。暖炉の火を絶えさせたのは数時間前だろう。疲れて早めに眠ったのだとしても、陽が落ちる前には就寝した計算になる。

(返事がないから、寝ているとは思っただけれど)

薄暗い廊下。その先には明るい事務所が待っている。ふと目を向ければ、視界を通して脳裏が白く点滅した。ここ最近、助手からの強い推しもあり、アンティーク調の内装にこだわった電球は、少し贅沢なシャンデリアに替わっていた。彼としては、部屋の雰囲気崩さないための苦肉の策だ。その分、財布の中は冬模様なわけだが。

(やっぱり、電球の方がいいと思うのだけど……)

助手曰く、暗い部屋の中で事務作業は目に毒とのこと。事実、照明を替えてからは夜の事務作業で目が疲れることはなくなった。ついでに、作業中に居眠りすることも少なくなった。

しかし、いいことづくめでもない。暗い街中を通って帰宅してすぐにこの力強い光源は目に毒だ。彼は常々、白く染まる視界の中で大真面目にそんなことを考えていた。

「スチュアートくん？ もう眠ってしまったのかい？」

言いながら、彼は言葉にしようのない不安に胸中を駆られていた。早めに眠ったにしては、おかしいのだ。そもそも、陽が落ちる前に照明を点けるなど、普段なら絶対にしない筈だ。何より、眠るのであれ

ば照明を切っていなければおかしいのだ。

(……いや、玄関の鍵はさつき開けたじゃないか。窓だってそうだ。侵入された形跡はなかった)

ホワイトアウトした視界を忌々しく思いながら、目を閉じて頭を振る。そうして視界を少しだけ回復させたところで、まずは足元を見た。

(足跡はない。スチュアートくんはここも掃除をしたらしいね)

ならば、ただの消し忘れだろうと。彼は足を進めることにした。少しずつ目を慣らしながら、眩いリビングの中に身を投じ、まだ少し点滅する視界が目の前に向いた時。

そこには、暖炉の傍で毛布にくるまって横たわるエミリー助手の姿があった。

「エミリーくん!?!」

今度は別の意味で目を白黒とさせて、慌てて彼はエミリー助手に駆け寄った。そしてすぐさま顔色を見ると、少し血色が悪いことがわかる。脈をはかるために首元に手を当ててみれば、ほんのりと温もりが伝わってきた。

(……脈はある。乱れてもいない)

毛布を剥いで外傷がないか確認するが、何かをされた様子は確認されなかった。

「う、うう……」

「っ、エミリーくん!?!」

ということは、まさか深刻な持病が?

エミリー助手の苦しそうな声が聞こえて、慌てて彼は名前を呼んだ。何度か彼女に呼びかけていると。

「ウォーカー様……?」

「っ! 気が付いたかい?」

うつすらと、彼女が目を開けた。意識が朦朧としているのか、視線は定まっていない。しかし、徐々にその瞼が開いていくと、今度は目をまんまるとさせて「Wow!?!」と大きな声をあげた。

「あのっ、この状況は一体……?!」

エミリー助手からしてみれば、その状況はまさに夢のようであった。憧れの彼に抱き起されて、まつすぐ瞳を見つめられている。まるで、おとぎ話に出てくる王子様とお姫様のラブシーンのようだ。

起き抜け早々の混濁した思考も合わさり、冷静ではいられなかった。顔はみるみる色づきの良いリンゴのように染まり、今すぐに湯気でも上げてしまいそうな勢いだ。

「エミリーくん、落ち着いて。僕も状況がわかっていないんだ。ただ、帰ってきたら君が暖炉の近くで倒れていてね。……何があったんだい?」

努めて冷静に語り掛ける彼。その甲斐もあってか、エミリー助手の視線は少しずつ定まり、真つ赤だった顔はほんのりと朱に染まる、といった具合にまで落ち着いた。

「えっと、確か……あつー!」

そうして冷静になったところで、エミリー助手は気が付いたように声をあげる。口に手をあてて、その視線は火の灯っていない暖炉に向かった。

「ウォーカー様、申し訳ありません! 私、今日のお昼に尽きてしまっていた薪を補充しようとしていたのですが……お店が、閉まっています」

彼が暖炉に目を向けてみれば、その中に炭や燃えカスは残っていないかった。

「暖炉の掃除は、君が?」

「はい」

しゅん、と落ち込んでいるエミリー助手。彼は自分の着ていたコートを脱ぐと、彼女にそれを羽織らせた。

「ありがとう。そろそろ、暖炉の掃除をしないといけないと思っっていたんだ。……ところで、何時からこつちに来ていたんだい?」

「えっと、昨日の朝にこちらに着きました」

「えっ、朝? 薪はまだ三日分あったと思うのだけれど……」

「三日分? ウォーカー様、薪は昨日見た時には、既に尽きてしまっていましたよ?」

「……なんだって?」

鳩が豆鉄砲を食らったよう。そんな使い古された言葉が似合うほどの間の抜けた顔で、ぽかんと彼はしばらく呆然となった。彼が出掛けた時には、確かに薪の貯蓄があつた筈だと記憶していたのだが。

「あつ、それともう一つ。ウォーカー様、家の鍵を掛け忘れていましたよ? 戸締りはしつかりしなければ、泥棒に入られてしまいます!」

「鍵が? ……確かに、鍵は掛けた筈なんだけど」

エミリー助手から思わぬ指摘を二度受けて、ウォーカーは顔を引き締めて思考の海に潜った。

(鍵は確かに掛けた。僕の勘違いじゃなければ、間違いない。薪は……記憶違いだった? いや、だけど尽きてはいなかった。でも、ここでスチュアートくんが嘘の証言をする意味はない)

エミリー助手は彼の真剣な顔を、目を輝かせて見つめていた。しかし、彼はそんな様子に気付いた風もなく、彼女に質問を投げかけた。

「ここに来て、前とは変わって、なくなったものはないかい?」

「ひゃいつ?! あつ、えつと。小物の類まではわかりませんが、変わったところは特になかったと、思います。はう……」

寒い冬の夜だというのに、エミリー助手の胸中だけは春を通り越して真夏日が照り付ける勢いだ。顔からは今にも湯気が出てしまいうなほど、またも真つ赤に染まつていた。それを隠そうと、彼女は頬を両の手で覆って首を小刻みに横に振って悶えていた。

(泥棒でもない……? まさか、本当に薪泥棒なんて奇特な……いやいや、そんな馬鹿なことあるものか)

単に自分の記憶違いだ、と彼は無理やり自分を納得させた。

「戸締りについては、今後、更に気を付けるよ。もう夜も遅い。スチュアートくんは、僕のベッドで寝るといい」

「っ?! そ、そんなウォーカー様! わ、私たちは、まだ、そのっ、婚約もしていないのに。同じベッドで寝るだなんて……!」

「スチュアートくん!? 誤解、誤解だ! 僕はこっちのソファで寝るから!」

話が突飛な方向に流れたことに慌てながら、彼は必死に弁明を口に

した。

エミリー助手は、サンタクロースの鼻のように真っ赤に染まった顔のまま、それが誤解とわかると今度こそ両手で顔を覆い隠してしまっただ。

しかし、そんな平穏も数秒の出来事。顔は依然として赤いまま、エミリー助手は何かを覚悟したような顔つきで口を開いた。

「私はここで寝ます！ 絶対に動きませんッ！」

「ええ?!」

それでは彼女が風邪を引いてしまう。彼は慌てて考え直すように、あれやこれやと言葉を重ねたが、その言葉は徹底して口を閉ざして頬を膨らませた彼女に弾かれた。

彼女はこうなったら梃子でも動かぬ。この家に押しかけて来た時から身にしてみてわかっていた。彼は折れざるを得なかった。

しかし、だからといって淑女をひとり雑魚寝させるのは、彼の矜持が許さない故に。

彼はその場を少し離れてシャンデリアの灯りを消すと。すぐさま彼女のもとに戻り。

「なら、僕も今日はここで横になるよ」

助手エミリーに背を向けて、布団はしつかり彼女を覆えるように。

彼の方は少し隙間ができてしまったが、その程度は我慢した。

「強情です。ウォーカー様は、変なところで強情です」

「……まさか君に言われるとは思っていなかったよ」

ピタ、と背中と背中が合わさった。少しだけ、エミリー助手の方が彼の方に寄ったのだ。

「独りで寝た時は、とても寒かったです」

「……昨日はどこで？」

「今と同じ場所です」

暖炉の火もない状態で、毛布一枚。寒いに決まっていた。

彼は小さく溜息を吐いた。

「次からは、僕が居ないときは絶対に、僕のベッドで寝るように」

「まだ婚約もしていない殿方のベッドに入るのは、はしたないと思

ます」

「僕が許可しているから、いいんじゃないかな」

途端に、部屋がシンと静まった。綺麗な暖炉も、整頓された部屋も、音は出さない。

(……もう寝たのかな)

探偵ウォーカー。彼もそろそろ寝ようかと、瞼を閉じた時だった。

「とても、あたたかいです」

「……そうだね」

二人はその言葉を最後に、口を閉じた。

暖炉の火が灯らずとも。

背中からは確かに、ぬくもりが伝わり。

あたたかさが、その身を包み込むのであった。

日常の音

頬が紅潮し、熱のこもった荒い息が深く吐き出された。苦しそうに身じろぎを繰り返し、弱々しく小さな声を上げ、彼の形の良い眉は八の字に歪んだ。

彼が体を時折震わせていると、ピピツ、と電子音が小さく鳴り響く。「ウォーカー様、失礼いたします」

エミリー助手の手が布団の中へ。探偵ウォーカーの寝巻に手を滑り込ませると、そのままそつと、体温計を抜き取った。

「38.7℃……風邪、でしょうか。ウォーカー様、ごめんなさい。私が、強情だったばかりに……！」

エミリー助手は今にも泣き出しそうなほど悲愴な面持ちになっていた。まるで、大事な家族の最期に立ち会っているような、そんな雰囲気。探偵ウォーカーはそれに精一杯の笑みで返した。

「いや、これは。僕が強情だったから、さ。だから、スチュアートくんが、気に病むことじゃ……ごほつ、ごほつ」

「今は横になってください！　すぐに薪と……それから、食材を！　栄養のあるものを買ってきますね！」

「いや、そこまでしてもらうわけには……」
「くれぐれも、安静にしてください。すぐに戻りますから！」

声をかける間もないとはこのことか。エミリー助手は疾風のごとく部屋から出て行ってしまった。あわてんぼうで、強情で、とにかく真っ直ぐなのは相変わらずの様だ。探偵ウォーカーはそのことにひとまず胸をなでおろし――

『Wow——?!』

どんがらがつしゃん、奥の階段から鳴り響く騒々しい音に、むしろ不安の方が勝った。体のたるさも相まって起き上がるのは億劫だったが、もしもがあつてからではいけないと、重い体を起こそうとしたが。

『ウォーカー様、私は大丈夫なので、安静にしてくださいね！』

「またも釘を刺されて、またエミリー助手の安否も声で確認できたところで体を起こすのをやめた。しかし、やはり不安は際限なく湧いてくるもので、探偵ウォーカーはつついカーテンの隙間から外を覗き見ることにした。」

「……スチュアートくんは、本当に大丈夫なのかな？」

彼女には気づかれぬように、彼はその後ろ姿を見送った。急いでいるようで常に駆け足で、後ろ姿が見えなくなるまでの間に二度も転びそうになっていた様子を見ると、下手なサスペンスホラー小説よりもハラハラさせられた。

もしも体調が万全なら、絶対についていった。喉元につつかえるような違和感を覚えながら、溜息を一つ。いつもの白い天井を見つめた瞳は、静かに閉じられた。

眠りの世界は、すぐに彼の意識をさらっていくのであった。



探偵をやっていると、普通ではない体験をすることは数多くある。

例えば、殺人現場に居合わせることが多くなる。これは探偵の嗅覚、第六感とも呼ぶべきものが、自然と自分の足を事件の方に向かせるのだ。窃盗から殺人まで程度は問わず、幅広く。

しかし、それは無意識に働いている力だ。職業病とも呼ぶべき恐ろしい力が、勝手に事件の入り口へと誘導してくる。そして事件は巻き起こり、培ってきた観察眼と推理力をもって、犯人を追い詰める。

そう、探偵は犯人を「追い詰める」仕事だ。それはまるで、人を断崖絶壁の足場の隅まで押しやるような、相手の生還への希望を押し折るような。そんな仕事だ。

もちろん、事件を解決すれば遺族に感謝されることはよくある。正しいことをしたというのは間違いがない。だが、探偵が一人の人間の人生をまるまる変えてしまう力を持った職業である事実は変わらない。大いなる力には、大いなる責任が伴うとは、よくいったものだ。

例えば、そう。犯人を追い詰めてしまったが故に、刑務所で自殺を

はかった者もいた。証拠も、現場の状況も、人々の証言も照らし合わせて、間違いなくそれは殺人犯だった。事実、探偵ウォーカーの推理は的中していたし、悪いのは殺人という罪を犯した犯人だ。

しかし、もしも自分が犯人を言い当てなかったのであれば。

もしかすれば、その人は生き残っていたのではないだろうか？

屋根裏の道化師事件。あの時の犯人もそうだ。

支配人は自殺した。きつと、事件を闇の中に葬って、真犯人を庇いたかったに違いない。下手に答弁しては、ボロがでてしまう可能性がある。

そして真犯人のコレットは、他ならない探偵ウォーカーに追い詰められたが故に、その身を断崖絶壁に投げてしまった。警察も、世間も、他の関係者さえ誰も気付いていない真実。それを探偵ウォーカーが突きつけたために、彼女は自らの命を絶った。現実という舞台の幕を下ろした。

他ならない探偵ウォーカーが、彼女が命を絶つきっかけを作ってしまったのだ。

これは、他の誰かに出来ることではなかった。彼しか気づいてない真実を突きつけてしまったから、彼女は自らの命を絶った。

——これじゃあ、どちらが殺人犯かわかったものではないじゃないか。

コレットは殺人の理由を、舞台上演じるためだと言った。大切な人が死ぬ気持ちかわからないから、それを知るために大切な人をこの手にかけたのだと。

ならば、それを知ることができた彼女であれば。もう二度と、殺人を犯さなかったのではないだろうか。役者として、輝かしい未来を歩んでいたのではないだろうか。

人形のように虚ろなくつもの瞳が、ウォーカーを見つめていた。

「お前が、私たちを殺した」

「お前がこの中で、誰よりも多くの人間を殺した」

「お前こそが、真の殺人犯だ」

顔の無い口が、好き勝手に言葉を浴びせかけてくる。いやらしく、蔑むように、嘲るように、これ以上ない憎しみを込めて。ドロドロに混ざり合った声が、果ての見えない暗闇を歩くウォーカーを責め立てた。

「見ろ、こいつは奴に子どもを医療ミスで殺された」

「コイツは、ヤツの不注意のせいで車に轢かれて、右半身が麻痺した」
「コイツは、野郎の執拗ないじめに心を壊して、正常な判断がつかなかった」

「そうそう。確か、未来ある最高の舞台役者まで殺したそうじゃないか？」

ウォーカーの足が、その言葉を耳にして思わず止まる。それを好機と見るや、顔の無い口はいやらしく歪められて口々に囁いた。

「あの支配人、彼女の父親だったそうだな」

「父親が娘を想う気持ちさえも踏みにじって、真実を突きつけた結果がこれだ」

「ああ、誰も救われない。今回、誰が救われたんだ？」

「殺された役者たちか？ いや、ちがうな」

「子を想い自殺した支配人か？ さぞ無念なことだろなあ……！」

「未来を奪われた真犯人か？ そんなことあるわけがないっ！」

「かの大女優か？ そんなわけもない！ むしろ失ったものしかない！」

「一番救われたのは、お前のちっぽけな自尊心じゃないのか？ 探偵さんよオ」

けらけらと嘲笑が、ウォーカーの耳に突き刺さった。拳を作った手は血がでるほどの力で固く握りしめられている。額から汗が落ち、唇は自ら噛みしめて言葉を閉ざしていた。

「見ろ、あの最期を」

「これからという時。夢も、才能も、実力もある役者だった」

「お前が口を閉ざせば、真実は闇の中だ。そうすれば、未来が閉ざされることもない」

「どうだ？ お前の自尊心は満たされたか？」

「探偵としての探求心とやらは、命よりも重いらしいツ！」

「そりゃあ傑作だ！」

「ほうら、ご本人の登場だ！」

その言葉に、俯いていたウォーカーは慌ててその顔をあげた。すると、先ほどまでであった暗闇は、あの日の再現。先の無い断崖絶壁と、それを背にするコレット。そして、コレットから数歩の距離の位置に居る自分。

「……………」

コレットの虚ろな瞳が、ウォーカーの目を射抜いた。思いがけず目が合ったことに怯み、彼は肩を跳ねさせた。いつの間にか握っていた拳もほどけ、噛みしめていた唇も、今は馬鹿みたいにポカンと開いていた。

「……………」

彼女の瞳を見ていると、中身のないプレゼント箱を見つめているような、奇妙な心の重圧を覚えた。かけるべき言葉も見つからず、挨拶のできる雰囲気でもなければ、声を発することさえ許されなさそうな、異常な沈黙。

「…………さようなら、探偵さん」

視線を切り、断崖絶壁に向き直ったコレットが、確かにそう呟いた。まさか、とウォーカーが彼女に駆け寄ろうとした時には、既に彼女の体は暗闇の中に投げられていた。

「間に合え——っ！」

願望が口からこぼれおちた。しかし、断崖絶壁の隅まで駆け寄った時には、既にコレットの体は闇の海に溶けて消えている。膝について崖の奥に差し出した手は、むなしく宙をさまよった。

「ハハハ！ みろっ、探偵の滑稽な姿を！」

「俺たちの声には耳も傾けなくせて、あの役者には随分と入れ込んでいる！」

「ただ真実を追求する姿勢はどこに消えた？」

「そうら、まだ助かるかもしれんぞ？ 打ちどころが良ければ、今から

手当すれば救えるかもしれん」

闇の奥を見つめていたウォーカーの瞳に、怪しい光が宿る。

「これだけ暗いんだ。下は海という可能性もあるなあ?」

「そら、波の音が聞こえるだろう?」

「いいや、これは川のせせらぎだ」

「何を言っているのか。これは鳥のさえずりだ」

「いいや、これはあの役者の悲嘆だろう?」

「怨嗟の声かもしれんな?」

「死ぬに死にきれず、苦しみがいている役者のものかもしれんなあ?」

「なら、探偵さんはどうするのか!」

「実に見ものだ」

ウォーカーは、虚ろな瞳を闇の奥に向けながら立ち上がる。そして、断崖絶壁の隅に、足をかけた。

「そら、救え!」

「お前が殺した者をひとりでも救ってみせろ!」

「俺たちの気持ちを晴らしてみせろ!」

「さあ!」

「さあ!」

「死ね!」

コレットを助けるために。さあ、いこうか。

自らも、その闇の中に身を投げ出そうとした、まさにその時。

不意に、ウォーカーの左手が反対側から引つ張られた。

自分以外の誰かが居ることに驚き、目を見開いて振り返ってみれば、そこにはエミリー助手が立っていた。

「ウォーカー様」

彼女はその細腕からは考えられないほど力強く、ウォーカーを崖とは反対側に引つ張っていく。

「さっ、帰りましょう」

エミリーが向かう先を見た時、ウォーカーはその輝きに目を焼かれた。

そして二人は、輝きの向こう側に、姿を消したのであった。



「ん、ん……」

沈殿していた意識が、徐々に浮き上がってきた。目を開けてみれば、モザイク画のような白い天井が。ぼーっとしたまましばらく見つめていれば、それは徐々にはっきりとした形を取り戻していき、きれいな写真に切り替わった。

ふと、カーテンから漏れる光が気になってみてみれば、既にオレンジに色を変えていた。夜が近いらしい。

「あー……」

何をどうしていたのか。混濁した記憶が辿っていくと、自分が風邪を引いて寝込んだところまでは思い出した。同時に、買い出しに行つたエミリー助手のことがふと気になった。

「スチュアートくん？」

呼んでみるが、返事はなかった。お手洗いか、それとも帰つてしまったのか。まさかまだ買い物の最中というわけではないだろう。それよりも誘拐という線を追つた方が現実的だ。

そこまで思考してみると、ウォーカーは自分の体調が楽になっていることに気が付いた。まだ少し肌寒いが、咳もでなければ思考が混濁することも無い。少し気だるい感じはするが、動くのがつらいとはいえないほどだ。

そこまで感じると、今度は自分の服が気になった。寝巻はぐつしよりと汗に濡れて、布団の隙間から入る外気がいやに寒く感じる。これは早々に着替えてしまったほうがいいだろう。ウォーカーはベッドからゆつくりと立ち上がると、部屋の中のクローゼットを物色し始めた。

「あったあった」

撫子色の、胸の部分に日本の花が小さく刺繍されたシルクの寝巻だ。ついでに肌着も取り出して、さっさと着ていた汗で濡れてしまっ

たパジャマと肌着を脱ぎ捨てた時。

『た、ただいま、もどりましたあく〜!』

「えっ……スチュアートくん?」

『わっ、ウォーカー様?! ごめんなさいっ、いつもお買い物をしている場所が混雑していて……! あっ、お薬を購入したので、すぐに持つて行きますね!』

口早にそう言ったエミリー助手に、ウォーカーは言い知れぬ不安を覚えた。魚料理を食べるときに、骨に怯えるような、そんな小さな心のつつかりだ。本当に大丈夫だろうか、としばらく手を止めて扉を見つめていると、ほどなくしてその扉が開いた。

「ウォーカー様! …こちらが風邪薬……なのです、けど」

そして、目と目が合う瞬間好きだとわかった——という冗談とも真実ともつかないものは置いておくとして。

エミリー助手の顔色の変化は一瞬だった。ゆでたタコのように真っ赤に染まると、今度は目をくるくると回して両手で大切そうに持っていた風邪薬の箱を縦横無尽に振り回した。その豹変っぷりはすさまじく、お化け以外には動じないウォーカーが表情をこわばらせ一歩引いたほどだ。

「ウォーカーしゃまつ?! ふ、ふく、くすり、ふくを飲んでくださいやい!」

「お、落ちついて! スチュアートくん、言っていることがわけわからないことに」

そう言いながら、宥めようとエミリー助手に近づけば、それを見たエミリー助手は。

「ぴゃあああ?!」

奇声をあげて、脱兎のごとく部屋から出て行ってしまった。ばたん! と部屋全体が揺れるほどの力で締められた扉を、ウォーカーはただ見つめるしかなかった。

「……スチュアートくんは、相変わらずだなあ」

それがおかしくて、思わず小さく笑みをこぼした。童顔がよく映える可愛らしい、白百合のような笑みを浮かべると、彼は誰にも聞こえ

ないように小さな声で。

「ありがとう、エミリーくん」

その言葉は一体、何に対してのものだったのか。

小さな日常の足音が、エミリー助手の可愛らしい足踏みの音と共に、もどってきたのであった。